
仮面ライダーソウル

MASKED RIDER SYSTEM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーソウル

【Nコード】

N5407J

【作者名】

M A S K E D R I D E R S Y S T E M

【あらすじ】

「俺はさ、人間に魂を売った悪魔だぜ。」悪魔が魂を売った時、魔界より来たりし魔物がその牙を剥く。選ばれし者と悪魔の魂が共鳴した瞬間、新たな戦士が雄叫びを上げる。魂の覇者、仮面ライダーソウル、その魂は誰が為に…

プロローグ（前書き）

どうもMASKED RIDER SYSTEMのハニーです

僕なんかの案に協力してくれる三人様には非常に感謝しています

僕自身は文才が無いのですが一生懸命書いていきます

それでは仮面ライダーソウルお楽しみください

ブローグ

その日は朝から鈍色の雲が厚く垂れ込み、雨も降っていた
俺が働く喫茶店“レクイエム”は閑散として、暖房が入っているに
も関わらず冷たく感じた

「そつえば優一君、明日は英一の命日だね」

今日は客は来ないだろうと思っていると唐突に恭さんから言われた。

恭さんとはレクイエムのマスターの事で本名を刻城 恭也という。
非常にダンディな人物で立派な口髭と渋い声が特徴だ

「そつえばそうですね」

英一とは俺の親父の名前だ。親父の命日の事などすっかり忘れてしまっていた

親父は学者だった。悪魔史やら考古学やらの研究をしていたらしい
が、良く知らない。飯も食わずに何日も部屋に籠ることも珍しくなかった

そんな親父も過労が祟ったのか俺が高校生の時に死んでしまったのだ

「実は僕、英一と一緒に研究してたんだ」

「えっ？本当ですか」

これもあまりに唐突だった。親父と恭さんが友人なのは知っていた

が研究仲間だったとは知らなかった

「それで優一君にコイツを渡すようにって約束してたんだよ」

そう言っただけで恭さんはカウンターの中からティッシュケース程の大きさの真っ黒な木箱を取り出した。蓋には真っ赤な文字？が書かれていてその箱の周りだけ異様な雰囲気覆われているように感じた

「これは？」

「僕と英一で研究した成果の一つさ」

言いながら恭さんは蓋を開ける。中には鈍く輝く髑髏の装飾が施された機械があった

「コイツはバジユラ。雷帝バジユラ。人間の希望だよ」

「は？」

俺の出した声はあまりに間抜けだった

そう

これが俺とバジユラ

そして悪魔との闘いの

始まりだった

プロローグ（後書き）

登場人物紹介

みかげゆういち
御影優一

仮面ライダーソウルに変身するこの小説の主人公。黒髪に黒い瞳。21歳。喫茶店レクイエムでバイトしている。

基本的には優しく穏やかな性格だが芯は強い。

亡き父からバジュラを受け取りソウルに変身して悪魔と戦う。
テラー

第1話：一ヶ月後（前書き）

ども、文才が欲しいと最近嘆き気味の二番手、ジャードです。

初めてのリレー小説なので、張り切っていいこうと思います。

でも……次の方々に上手く繋がられるかなあ……？（イキナリ不安直撃）

では、なんやかんやで第一話。一話なのにも関わらずイキナリ戦闘シーンです（早っ！！）

駄文全開（意味不明）ですが、お付き合い頂ければ幸いです。

第1話：一ヶ月後

……恭さんからアレを託されてから一ヶ月……早いものだ。

今はレクイエムでの仕事を終え、ちよつとばかり散歩をしている。

……それ以外にやる事無いからな。今日は晴れてて、歩きやすいし。

「優一……早くレクイエムに戻んねえか？正直、散歩なんて暇すぎる。」

「戻ったって仕事終わってるんだから、余計暇だぞ？」

「どっちにしる暇なんだって！……あゝ、アイツ等が来れば……！」

「お前、そのアイツ等に追われているって事忘れたか？」

「つたく、自分勝手な奴だな。」

「……え？誰と会話してるかって？そういえば、まだ紹介してなかったっけか？……では、紹介しよう。」

今俺と喋っているのは……一ヶ月前に恭さんから預かった髑髏の装飾が施された機械……バジユラだ。喋る理由は、このバツクルにバジユラの魂がやどっているらしい。ちなみに、バツクルに口のような物が付いていて、喋る度にそこがカクカクと動く。また、8万歳という超高齢のジーサンだ。……なのに、軽い喋り方をしている。

「……アイツ等って言っても、よく分からない事だと思う。一つずつ説明していくと……」

「……っ！？いきなり殺気！？って事は……？」

「ククク……見つけたぞ？裏切り者お……」

……やっぱり。怪物だ。今話そうとしたくアイツ等>でもある。

「おつ、調度良いタイミングで来たな、元同志！？」

「今度こそ……貴様を始末する！」

この異形の名前は、悪魔と書いて<テラー>と読む。2種類の姿を持ち、今の姿形は全悪魔共通らしい。髑髏の頭に二本の角、ゴツゴツした硬質な黒い体をしている。

……つまりは、バジユラは元悪魔だという事だ。

「返り討ちにしてやる……優一！」

「ああ、今は憑依体じゃないから……一気にケリをつける！」

もう一方の姿は憑依体って言うんだが……その説明はまた後でな。説明する余裕が無い。

「行くぜっ！」

バジユラの言葉と共に、バジユラの魂入りのバックルを腰にあてると、一瞬でベルトと化す。

「変身！！」

叫ぶと共にバックルにあるサイドハンドルを引く。すると、カクカクしていたバジユラの口（？）の部分が完全に開き、中にあったであろう、宝石が露になる。そして、俺の体を影のような物が包む。

「よっしゃ……変身!!」

口が完全に開いているのにも関わらず、どうやったかバジユラも叫ぶ。すると、宝石が紅く輝き、俺を覆っていた影が弾け飛んだ。

「な……何!？」

悪魔が驚愕している。……当然だろう。今の俺はく御影優一としての姿>をしていないのだから。

その姿は……黒いスーツ。二本角の仮面。体を包む鎧。……機械的な印象を受けるが、ベルト（バジユラ）のみ生体的な姿形。どこかアンバランスだが、まるで特撮にでもいそうな姿だ。

「その姿……まさかバジユラ、貴様、人間ごときに力を貸したのか!？」

「俺はさ、人間に魂を売った悪魔だぜ。……お前等とは縁を切ったんだ、とつとと消えな!」

……戦うのは俺なんだがな。
そう心の中でそう嘆くと共に、

「……消えるのは貴様とその愚かな人間だ!!」

悪魔がそう言って、襲い掛かって来た。

「ガァァー!!」

「危なっ……お返しだ!」

「グッ!?!」

悪魔のパンチを上手くかわし、鳩尾の辺りに上手く蹴りを加える。
案の定、悪魔は苦しむ。

「はあああ!!」

「グッ、ガッ……ぐああ!?!」

悪魔が怯んでいる隙に、次々と攻撃を加える。……ちなみにこの姿は、武器を一つも持っていない。つまり、肉弾戦が主体となる訳だ。

「ギイ……貴様!!」

「うおっ!?!」

いきなり悪魔が腕を振り回してきた。……なんとか避ける事が出来たけど。

「今回はたいした事無いな……」

「とつととケリを付けるぜ!」

バジユラが言うと同時に右手に黒い影のような物が覆う。……なん

か、力がみなぎっていく気がする。

「馬鹿な！？こんな……下等な人間に、この俺が負ける訳が……！？」

「人間は……少なくとも優一は……俺達悪魔より魂が濁っちゃいねえ！その汚れた魂、散らせ！」

バジユラのその言葉と共に、右手を覆う影が濃くなる。……光という存在を否定するかの如く。

「**ダークネスストライク！！**」

そして、二人（？）で叫びながら、影で覆われた右手で悪魔を殴り付けた。

……これが今の姿の必殺技、**<ダークネスストライク>**。悪魔を倒す為の、悪魔の力を使った技。

悪魔は断末魔の悲鳴を上げながら、爆散していった。

……まるで、バジユラが宣告したようなく魂が散っていったような消え方に俺は見えた。

……俺の運命は、亡き親父によって恭さんからバジユラを託された時……いや、親父と恭さんが<研究>をしていた時から定まっていたのかもしれない。一ヶ月前から突然現れた悪魔と戦い続け、何となくそう感じた。

人間と悪魔との戦い……それが本格的に始まるのも、そう遠くはないかもしれない……。

何故か、俺はそう感じてしまうのだった。

第1話：一ヶ月後（後書き）

登場人物？紹介

バジユラ

元悪魔^{テラー}。しかし他の悪魔^{テラー}を裏切って人間側についた。
報復として身体を失ったが魂は優一の父、御影英一に救われて開発
中のライダーシステムプロトタイプの核となる。

お喋り、且つ好奇心旺盛。

年齢は八万歳。豊富な魔界の知識と魔力で優一をサポートする。

第2話：ロールアウト（前書き）

どうも正六面体です。引つ込め！と言われてもしょうがない私なのですが、ソウル第三話書かせていただきます。最近より良いものを書けるように頑張って色々試行錯誤しています。よろしくお願いします。

第2話：ロールアウト

コンクリートで固められた部屋の中、強固な特殊防弾ガラスで二つ区切られた一方に私はいる。こちら側には私の上司も椅子に座り、もう一つの部屋を見ていた。私は机に設置されたマイクのボタンを押して向こう側の人物に指示を出す。

「^{ひん}聖君、始めなさい。」
『了解。』

スピーカーを通して彼の返答が聞こえる。ガラス越しの向こうにいる青年、私が聖と呼んだ彼は複雑な装置を搭載したベルトを腰に巻いている。腹部にあるその装置のサイドハンドルを引くと、4つの菱形で構成される“X”回転し、“+”になる。それと同時に装置の中心に嵌められた青い宝石が露わになった。

『変身』

【XCE - ready】

こたわりだか何だか知らないけど、掛け声なんて必要ない。先程の操作だけで私たちのシステム、“エクス”は起動させることが出来る。

宝石から光が発せられ、聖君の全身を包む。それは白いスーツとなり、その上から特に上半身を中心に重厚な装甲が覆っていく。胸部を守るプロテクター、肘から腕を覆う装甲は攻撃力と防御を兼ね備えた物。脛のフットプロテクターもベルトに搭載された高性能AIによって定位置へと装着された。科学の粋を集めて作られたこのシステム、やっとロールアウトする事が出来る。

「今日の起動テストは此処まで。システムを解除しなさい。」

『悠姉さん、エクスカリバーのテストもやらない？』

「何言ってるの聖君。あれは明後日の予定なの。さっさと解除しなさい。」

エクスの装甲を纏う聖君は今だ解除することを渋っている。何してるのよ、まったく。

「柊、やってみようじゃないか。上には私から話して置こう。」

『白崎さんは話が分かる方で助かります。悠姉さん、文句ないですよ。』

「しょうがないわね、まったく。悪魔^{テラー}を起動します。」

白崎さんの言うことなら仕方が無い。上司の命令に従うのが私のスタンス。スイッチを操作し、テラーを模したロボットを三体床から出す。この組織が集めたテラーの資料を基に作ったロボット。そう、システム・エクスは対テラー用のもの。私が飛び級を重ねて、スカウトされたこの組織で一から作り上げた。

「聖君、そのロボット絶対に壊さないでね、それ一体いくらすると…」

【XCE Cariber-ready】

寸分の狂いも無い銃弾の嵐が、一体のロボットに着弾する。頭部のAIを破壊したらしく、直ぐに機能を停止した。他の二体は二手に分かれてエクスに攻撃を加えようとする。直ぐにエクスカリバーを剣の状態にし、一体のテラーロボットの腕、足を切り落とす。そして心臓部分に当たるモーターを貫いた。動力源を失った二体目も動かなくなってしまう。最後のロボットが後ろに回り込んで攻撃を仕掛けようとするが…

「ハアッ！」

引き抜いたカリバーを逆手持ちで引き抜き、最後のテラーロボットの首に突き刺した。そのまま振り向きざまにパンチを繰り出して距

離を離す。助走をつけて飛び上がり、キックをかました。首筋を貫かれ脆くなっている為、簡単に頭部と胴体は離れ離れになってしまふ。まったく…！

「今すぐシステムを解除しなさい！！！！」
私の声が響き渡った。

「ああっ！快っ感っ！」

私と白崎さんのいる部屋に入ってきた、髪の毛をフワリとした感じにさせ、耳には十字架のピアスをした青年。聖劍^{ひじりけんじ}二、私の開発したエクスの装着適任者。基礎体力や状況判断能力を初めとして、銃撃のセンスなども私も認める程の技量を持っている。しかし、気に入らない点が一つ。“上司である私の言う事を聞かない”事。先ほどの様に、私情でテストプランを変更したり、指示を無視してテラーロボットを破壊したり…。

「聖君、ちよつとこつち来なさい。」
手招きして彼を呼ぶ。『何ですか？』などと言って近付いてきた彼の耳たぶを引っ張り、耳元で叫んだ。

「な、ん、で！私の命令を無視したの！！」
「痛い、煩いよ。一々堅い事言うなって悠姉さん。」
「主任と呼びなさい、主任！！それに私の名前は悠^{はるか}！勝手に読み方を変えないで！」

私は耳を離し、着ていた白衣を脱いで眼鏡と髪を纏めているヘアバンドを外す。こういうときは、あれに限る。

「それで白崎さんは分かるけど、なんで聖君まで着いてくる訳？」
喫茶レクイエム、落ち着いた雰囲気のお店。この店のコーヒ
ーは私のお気に入り。一度だけ白崎さんと一緒に来たこともあるけ
ど、普通は一人で来る。何時も座る端っこのカウンター席に腰掛け
ると、隣に聖君が、その隣に白崎さんが座った。

「いや、俺の今日のテスト結果を評価してもらいたくてね。」

「マスター、何時ものお願いしますね。」

「俺にも同じのください。」

マスターがコーヒーを淹れてる間、私は彼の評価をした。

「起動は完璧。カリバーでの攻撃方法も始めてにしては、二通りの
形態を確実に使い分けて戦っていた。そこは評価してあげるわ。」

「これはこれは。ありがたき幸せ。」

ふざける聖君は無視して、私は本題に入る。

「でも私は何回も言ったわよね？エクスはカリバーとパンチが主体
なの。キックは念頭に入れて設計してないから使わないでって何回
言ったと思うの！？壊れたらどうするのよ、ロールアウト前にブレ
ークするなんて冗談じゃないわ。」

「だったら、キックがOKな様に改良してくださいよ。」

「あのね、簡単に言う様だけど、機能を一つ追加する事がどれだけ
大変か知ってる？場合によってはシステムを一から書き直さなくち
ゃいけない事だってあるのよ。システムを作った私だから分かるの。
装着者の貴方はメカニツクの私と、作戦指揮の白崎さんの指示に従
えばいいの！」

一気に文句を言った所で、此处で働いてる青年がコーヒーを三杯持
ってきてくれた。

「はい、マスターのオリジナルブレンドです。」

「あ、ありがとう。えっと…、名前前に聞いたんだけどな…」

「御影優一です。」

「そうそう、御影君、ありがとう。」

「ごゆっくりお楽しみください。」

一礼をして御影君は戻っていった。珍しく礼儀正しい青年、聖君とは大違いね。私はそんな事を思いながらコーヒーを口につける。口に広がるほろ苦さと鼻を抜ける香ばしさは絶品。隣で『うまい!』とか騒いでる人は脳の片隅から追い出して、私はユックリと眼を閉じる。この一時が私のお気に入り。カップを空にしてから、再び私は聖君にエクスの使い方を指導する。

「御影、か…」

白崎さんが何か呟いていたけど、あまり気にしなかった。彼はエクスの作戦指揮を担当するので、今の所エクスの特徴を教えるのは私の役目。

「いい？エクスカリバーの威力は高いの。それで牽制して、近付く敵はパンチで倒しなさい。」

「俺、足技の方が得意なんだけど。」

「貴方の得意技よりエクスの方が優先なの。分かる？エクスと同調しなさいと言ってるのよ。」

「機械と融合とか、悠姉さんの台詞に合わないね。」

どこか可笑しそうに笑う聖君。

「あのね…」

再び私が口を開こうとするが…。

「これ、恭さ…マスターからです。内輪揉めはよくないって。」

私たちの前に置かれたのは、新しいコーヒーとショートケーキ。

「騒がしくてすいません、マスター。」

マスターは笑顔で答えた。マスターの心の広さにはいつも感服してしまう。私はコーヒーを一口飲み、ケーキを食べ始める。

「あ、苺もらい。」

まったく…。聖君…、君って人は…！今からでも装着者の変更は申請できたかしら？

第2話：ロールアウト（後書き）

ひいらぎ はるか
・柊悠

エクス開発者。設定年齢22歳。飛び級を重ねた理工学のスペシャリスト。その腕を見込まれ、エクスの開発主任としてスカウトされた。その性格は堅物で、妥協を絶対に許さない。喫茶レクイエムのブレンドコーヒーがお気に入り。

第3話：血（前書き）

どうもハニーですッ！

第三話は前後編があります！そうですW方式です！

今回は前編…言わば事件編といった感じでしょうか。

ちなみに後編はジャードさんです。微妙な終わり方ですが頑張ってください…（泣）

あ、感想下さい。お願いします！

第3話：血

ある日の朝。

俺はいつものように自転車チャリで喫茶店レクイエムへ出勤した。

背負ったバックの中にはバジユラが潜んでいる。始めの頃は『揺れる』とか『臭い』とか散々文句を言っていたが、今ではその暗さが中々居心地良いらしい。

「おはようございます!」

俺がレクイエムにつくと、既に恭さんが居た。仕込み等は終わったらしく、ニュースや新聞を見ながらコーヒーを飲んでいた。

「やあ優一君、今日はちょっと遅かったかな?」

恭さんからにこやかに小言を言われてしまった。意外と恭さんはこういう所に厳しい。挨拶とかマナーとかそういう社会一般的な事だ。

「すみません。バジユラが朝からうるさかったので…」

バックを置いて、レクイエムのエプロンをつけながら恭さんに謝る。バジユラが朝からうるさいというのは言い訳じゃあない。実際バジユラはうるさいのだ。

「ところでこれ知ってる?」

エプロンをつけおわると恭さんが新聞をみせてきた。一面の見出しにはでかかと『現代に吸血鬼現る?恐怖!血を抜く殺人』と書か

れている。一流の新聞社のもののはずだがチープな三流週刊誌の記事のようだ。

「なんすか、コレ？」

と尋ねると、恭さんは「いいから読んでみなよ」と言って新聞を寄越してきた。

記事の内容はこうだ。

昨日の午前六時ごろ。公園で〇し、佐藤 優子が殺されているのが発見された。死因は失血死。解剖の結果、被害者は同日午前一時ごろ殺されたらしい。現場に凶器となるような物はなく、誰かと争った痕跡も残されていない。死体も首筋に齒形があるばかりで、他に一切の証拠はなかった。警察は首筋に残された齒形の調査を進めているが、難航している模様…。

この事件の不可解な事がいくつかある。

一つ目は傷痕。

死体に残された傷は齒形が一つ。しかし齒形はどの生物のものか分からないらしい。

二つ目は死因。

先程述べたとおり、死体には齒形が一つだけ残されていた。つまり致命傷もこの齒形のはずだ。しかし齒形の幅はせいぜい20cm。いくら女性と言えど大人の人間を失血死させるには、些か小さい気がする。

三つ目は死体の状況。

これがこの事件の一番の謎だ。被害者が殺されたのは、およそ昨日の午前一時ごろ。そして死体が発見されたのが約五時間後の午前六時ごろ。しかし死体はほぼ完全に“ミイラ化”していた。

たった五時間の間にミイラ化していたのだ。

まさに現代のミステリー。仰仰きょきょしく記事にされるのもわかる気がする。

だが俺はなんとなく気付いていた。この事件の真相……。恭さんもそのつもりで記事をみせてきたのだろう。

「バジユラ、起きろ」

バックの中で半分寝ていたバジユラを起こして引きずり出す。やっぱり文句を垂れていたが知ったこっちゃない。

『なんだよオ、もっと寝かせろよオ』

「うるさい。それより、どうなんだこの事件。悪魔テラーの気配は感じるのか？」

そう言いながらバジユラの顔？を新聞に向ける。バジユラは黙って記事を読んだ。しばらくすると記事を読み終えたのか、バジユラは「当たり前だ！」と言った。

▲ ▲ ▲ ▲

「聖君、貴方この事件知ってるわよね？」

壁や床、デスクまでが白で統一された部屋。此処が俺達エクスタームに与えられたオフィスだ。

そこで俺が、いつものように自分のパソコンを使ってネットをしている（断じて遊んでいた訳ではないぞ）と悠姉さんにある新聞記事を見せられた。

「あ、これ？知ってるよ、当たり前じゃん」

それは今世間で噂になっている奇怪な事件の記事だった。もちろん俺だって知っていた。まるで吸血鬼が現代に蘇ったかのような、気味の悪い事件。

「白崎さんが、『コレに悪魔デラーが関わっているかもしれないから調査しよう』って」

さすが白崎さんだ。俺も薄々そんな気がしていたんだ。

「で、調査はいつから始めるのよ？」

「それなら心配いらないわ。『MB』の調査班が動いてるから」

…さすが白崎さんだ。手を回るのが早いわ。

「なんだ、俺の出番は無しか…」

何となくやる気が失せ、椅子の背もたれに体を預けた。ギイ^きと軋^きむ音がした。

「そんなことは無いわよ。実際に悪魔^{テラー}が関わっていたら貴方しか倒せないんだから」

まあそうなんだけどね。

この世界で唯一悪魔^{テラー}に対抗できる“エクス”は俺にしか扱えない。
“ライダーシステム”は他にも作られていたらしいが、完成したのはエクスだけだ。昔ある科学者が製作途中のシステムを持ち出したと聞いているがその後どうなったかは分からない。
まあ完成していたとしてもエクスには到底及ばないだろうが。

「てゆうかさあ『MB』って普段は何やってんの？」

「呆れた。貴方一応社員なんでしょう？」

「でもさあ悠姉さん。俺エクス着けて悪魔^{テラー}と戦ってるだけだし」

「…まあそうよね」

心底呆れられたようだ。『悠姉さん』というワードにも突っ込まれなかった。

「良い？『MB』：正式社名『Medical Being』は世界的な巨大複合企業よ。薬品や介護器具の開発なんかを主にやっている。CM見たこと無い？裏では昔から悪魔^{テラー}から人々を守ってるんだけどね」

ふうん。初耳…いや、一度白崎さんに聞いたっけ？

どっちにしろあまり興味のある話では無いが。

そう思っているとパソコンに『MB』の調査班から報告が来ていた。もちろんこの報告は悠姉さんや白崎さんにも届いている。

マウスを操作してファイルを開く。予想通り例の吸血殺人事件には悪魔^{テラー}が関わっているようだ…。

「行くわよ、聖君」

「りょーかい」

上着とヘルメット、そしてエクスに変身する為のアイテム『エクスドライバー』を持って席を立つ。悠姉さんも自分のノートパソコンを持って立ち上がり、俺達はそのまま部屋を出た。

▲ ▲ ▲

「バジユラ、なんか分かったか？」

『おう、バッチリ残ってるぜ。奴等の匂いがな』

俺達は例の事件の現場に来ている。といってもまだ警察の捜査が続いていたから近くまでだが。
それでもバジユラによると痕跡は残っているらしい。

『…ん？おい優一、あれ見ろよ』

バジユラに促された方向に目をやると見慣れた顔が三つ。聖さんと柊さん、白崎さんが此方に歩いてきていた。
俺は急いでバジユラをバッグに押し込んだ。
すると三人の方も俺に気付いたようで、柊さんが小走りに近寄ってきた。

「御影君！どうしたのこんな所で…」

「いやあほら、此处で殺人事件が起きたじゃないですか。野次馬ですよ」

嘘が半分、本心が半分だ。無関係な人達を悪魔テラーとの戦いに巻き込む訳にはいかないしな。

「皆さんはどうして此处に？」

俺も気になったので聞いてみた。まさか三人して野次馬ということもないだろう。

「…仕事でね」

白崎さんが口を開いた。俺もこの人には結構会っているが喋るのはかなり珍しい。

「警察の方だったんですか？」

「…いや、調査会社みたいなものだ」

白崎さんの言葉には「これ以上聞くな」という意味も込められているのが分かった。こういうのを無言の圧力というのだろうか…。

「…そうですか。…じゃあ、俺はこの辺で帰ります。マスターも待ってるんで…」

とりあえず此处にはもう用は無い。あとはバジユラと悪魔^{テラー}の匂いを追っただけだ。

…白崎さんの圧力も居心地悪いし。

「帰っちゃうの？マスターによろしくね」

「じゃあな、御影」

「……」

柊さんはにこやかに挨拶し、聖さんは軽く手を振った。白崎さんは再び無言だった。

俺は回れ右をして、足早にその場を後にした。

第3話：血（後書き）

登場人物紹介

聖 ひじり 剣二 けんじ

ライダーシステム“エクス”の装着者。24歳。格闘、武器の扱い、判断力、全て優秀だがお調子者な所がある。

しかし、それも只の欠点ではなく時に長所となる場合がある。

茶髪、黒い瞳。

左耳に十字架のピアスクロスをしている。癖なのか時々ピアスをいじる。エクス装着者に選抜される以前は腕利きのトラブルバスターをしていて、それなりに名前が知られている。

第4話：憑依体（前書き）

てな訳でどーも、ジャードです。

いやー四月ですねー。ある人は学年が上がれば、ある人は進級。またある人は社会人へと。様々な方がいると思います。僕も四月で中三です。……時が過ぎるのは早いですねー。

はてさて、それは置いておき、今回は戦闘シーン。……前回自分が担当したのも戦闘シーンでしたね。今回もちよつと不安ですが、お付き合い頂けると幸いです。
では第四話、どうぞ。

第4話：憑依体

「バジユラ、こっちで良いのか？」

「ん？ああ、^{テラー}悪魔の臭いがプンプンするぜ。」

^{テラー}悪魔の臭いって、どんなのだよ？と考えてしまつが、そこは突っ込んではいけないのだろう……多分。

「けど、事件の様子や^{テラー}悪魔の姿形から考えると……」

『今回ののはく憑依体＞か……厄介だね、全く。』

……ああ、憑依体の説明がまだだったな。

憑依体は、以前戦ったゴツゴツの異形とは違って、様々な姿が存在する。理由は、その名の通り憑依するからだ。それも、人間に。

^{テラー}憑依した悪魔はその姿によって、特異な能力を持つ。だから、厄介なんだ。

ともかく、戦うのは俺なんだが……と言おうとした刹那、

「キヤアアアア……！」

女性の悲鳴が。

……これって、まさか……！？

「バジユラー！」

『分かってらあー！！こっちだー！！』

俺達は、直ぐさま悲鳴の聞こえた方向へと向かった。

「遅かったか……。」

たどり着いた場所は……町外れの工場。そのど真ん中に……女性
は横たわっていた。息は……無い。

「クソッ……。」

「悔しがっている場合か？」

唐突に響く男の声。勿論俺でも、バジユラのものでもない。前方を
よく見ると、もう一人の男が立っていた。

顔立ちは良い。多分、十人に聞けば九割の人が「ハンサム」と口を
揃えるだろう。

……だがその表情は、気味の悪い笑みを貼り付けている。気のせい
か……嫌なオーラを纏っているようにも見える。

……いや、気のせいじゃ無いな。この人……いや、この「体の持ち
主だった者」も被害者の一人だ。

「この男の姿に言い寄られてノコノコ付いてくる女……ソイツに俺
の正体を見た時の顔と言っちゃあ、たまんねえなあ！その恐怖に満

ちた魂……まさに、俺達^{テラー}悪魔の最上級の食い物だなあ!!」

男……いや、悪魔^{テラー}の姿が変貌する。そこに立つのは……吸血鬼のよ
うな姿をした異形。この男に憑依した悪魔^{テラー}の姿。

「さて……後片付けをしてさつさと次の獲物を捜すとするかあ……
!」

『へっ!! 那么简单にやられるかよ!!』

「『変身!!』」

俺もその姿を、悪魔^{テラー}を倒す為の鎧で覆った姿へと「変身」し、悪魔^{テラー}
へと殴り掛かった。

▲ ▲ ▲ ▲

「……そうですか、ありがとうございました。」

御影君と別れた後、私達は聞き込み調査をしていた。けど……何も
手掛かりが掴めない。聖君なんて、私達が乗って来たバンの中で寝
てるし……やる気あるのかしら、彼?

「……私だ。」

一方で白崎さんは携帯で誰かと連絡している。多分、相手は『MB』

の調査班だと思っけど……。

「……………！？……………分かった。今すぐ行く。」

……………どうした事だろう？白崎さんが滅多に見せないような驚愕した表情を浮かべている。しかし、再び無表情へと戻り、携帯を切った。

「白崎さん？」

「柊、一度バンに乗れ。移動する。」

「……………え？どういう……………」

「早く。」

そう言って有無を言わず運転席へと乗り込んだ白崎さん。……………なにが起こったんだろう？私は不安ながらもバンに乗る。そして、白崎さんは強くアクセルを踏み、バンを急発進させた。

「ぶぎやあっ！？」

後ろで何かがぶつかったような音と、この世の物とは思えない悲鳴が聞こえたけど……………特に気にせず前を見据えた。

▲ ▲ ▲ ▲

「でやあっ！ー！」

「ぐっ!？」

先程から吸血鬼のような悪魔^{テラー}と戦っているけど……コイツ、たいしたことないな。

憑依体は憑依した人間によって姿が変わり、厄介な能力を持つって言ったけど……コイツ、人殺しを楽しんでいたのか、その姿に慣れていない。

人殺しっていうのも許せないんだけどな……!!

「はあっ!!」

「グガッ!？」

今度は腹に目掛けてパンチ。悪魔^{テラー}はその威力に吹っ飛んだ……筈だった。

「貴様……なめるなあ!!」

「うわっ!？」

突然悪魔がバックステップし、こちらに飛び掛かって来た。

……吸血鬼特有の、その鋭い歯を剥き出しにしながら。

間一髪避ける事には成功した。が、鋭い歯は俺の背後に立て掛けてあった鉄骨を噛み付け……いや、かみ砕いている。

血を吸う筈の吸血鬼だが……その歯、いや、口は、かみ砕く事にも発達しているのか？

「さあ……貴様のその血肉を!!その魂を!!俺に渡せええっ!!」

「渡す訳……無いだろ!!」

『その汚れた魂、散らせ!!』

バジユラのその言葉と共に、右手を濃い影が覆う。光だけでなく、敵である悪魔^{テラー}をも飲み込まんばかりに。

「はあああつ!!」

「ガアアツ!？」

再び飛び掛かって来た悪魔^{テラー}を、今度はその右手で殴り付けた。それが決め手になったか、悪魔^{テラー}はその顔を歪め……爆散していった。

爆発の中で倒れていたのは……あのハンサムな男。あの悪魔^{テラー}は力を出し切っていなかったから……多分、この男も無事だろう。

『ふゝ……なんとか終わったなあゝ。』

「なんとか、な……。」

この状況から、やはり警察と救急車を呼ぶべきだな、と考えた俺は変身を解こうとバツクルに触れた……刹那、

「変身!!」

【XCE - ready】

誰がの声と、聞き慣れない電子音声。振り向いた時には……

「はあっ!!」

「なっ!?!」

何かが、切り掛かって来た。

その「何か」は……白いスーツに、重厚な装甲で覆われた戦士。手に持つのは、剣。

『な、何だお前!?!』

「貴様は危険だ!!」

【XCE Caribber-ready】

バジユラの質問には答えず、剣を構える白い戦士。相手の持つ刃は光り輝いている。

「食らえ!!」

「うわっ!!」

なんとかその斬撃はかわす事が出来たけど……。
この戦士、一体何者なんだ!?!

▲ ▲ ▲ ▲

白崎さんがバンを飛ばした先には……廃工場。そこには、『MB』の調査班が既に待機していた。

「こちらです。」

調査班の方に連れられ、中を覗く。その瞬間、私達は硬直した。さつきから頭が痛いと思っていた聖君さえ、黙ってしまった程だ。

「でやあつー！」

「ぐっ！？」

既に悪魔^{テラー}と何者かが戦っていた。その「何者か」は、どこと無く悪魔^{テラー}にも見えるけど……そうでない、と私の心が告げている。一体、何故？

白崎さんは……こんな状況でも無表情。白崎さんは……あの「何者か」を、知っている？

そして、「何者か」は右手に影のような物を纏わせ、悪魔^{テラー}を殴り付けた。悪魔^{テラー}は爆散し、爆発後からは……男の、人！？一体どうなつて……！？

「……悠姉さん、アイツ、悪魔^{テラー}、だよな……？」

「いや、まだそう断定した訳じゃないけど……。」

「だけど……奴は危ない!!」

そう言って、聖君はベルトを装着して駆け出した。って、勝手に行動して……!!

「聖君、待ちなさ……」

「柊、止める。」

「え？」

唐突に私を止めた白崎さん。何を考えているの、この人は!?

「ちょっと!?!?どういう意味ですか!?!」

「……………」

無視。というか、無言。もとい、無言の圧力。あ……………こういう時の白崎さんって、中々反論出来ない。仕方なく、戦闘を眺める。

聖君はエクスカリバーで切り掛かる……………が、相手はそれを上手くかわす。中々良い動きだ。

でも……………本当に相手は一体何者だというのだろうか? 悪魔^{テラー}? いや、だったら同じ悪魔^{テラー}を倒す筈がない。仲間割れ? もしかして、味方? いや、だったら、何故今戦っているエクスを攻撃しない? エクスの攻撃を素早くかわしている以外の行動を敵は取ろうとしない。

『チツ……………早く退かなきゃな!!』

……………え!?!? 戦っているのとは別の声!?! 一体誰!?!?

そう疑問に思った瞬間、敵は再び右手に影を纏わせる。流石にアレを食らったら……！！
しかし、私の予感とは外れたようだ。敵はその拳を、地面に放ったのだ。

「うわっ！？」

流石に怯んでしまう聖君。辺りは砂埃が舞っていて、様子が分からない。

砂埃が晴れた時には……未確認の敵は、既にいなくなっていた……。

第4話：憑依体（後書き）

しろさき まこと
白崎 真

32歳

ライダーシステム「エクス」のサポーター。主に作戦指揮を担当する。

基本的に無口で、滅多に感情を表に出さない。無言でも相手を抑える程のプレッシャーを放っている。回りの人物いわく「無言の圧力」。

妻と子供を持つ一家の大黒柱。この二人だけに感情を見せるとか見せないとか。

第5話・三つ巴の戦い（前書き）

回りまわって、rubixcubeの出番です。またまた悠姉さんが怒鳴りつけます。あの人、かなりSかもしれませんね。考えてることとか…

第5話：三つ巴の戦い

「さて、聖君。私がどうして君を怒らなくてはいけないか、理由は理解してるはずよね？」

私達、对テラーの部署の社員に与えられたオフィス。机を挟んで向かい側に座る聖君に問い掛けた。いつもの事ながら、耳に下げた十字架のピアスを弄ってる。この癖何とかならないかしら…。見てるとイライラするわ。

「はい。分かってます。」

あれ？いつになく神妙な顔付きの彼。もしかして、日頃の私の指導が利いたのかしら？反省してるように見えるし、今日は軽めにしてもいいかもしれない…。

「この前、悠姉さんのショートケーキの苺を食べてすいませんでした。」

私の頭の中で何かが“プチッ”と言う音と共に弾けた。もう我慢できない。今日こそは、今日こそは絶対に！！

「ち、が、うー！なんで私や白崎さんの指示無しに変身したのよ！それに、私は貴方が変身する直前になんて言ったか覚えてる！？」

「あの悪魔^{テラー}を倒しちゃいなさい、聖君”だったと思う。”

彼の返答を最後まで聞かずに、私は書類の束を持ち上げ、彼の頭に何回も振り下ろした。

「私は“待ちなさい”って言ったの！この大馬鹿者！！その耳、ピアスごと千切るわよ！？」

「痛い、痛い！分かってますって。以後、気を付けます。」

マニュアルを棒読みしたような言い方で謝り、聖君はオフィスを出て行った。ったくもう！椅子に腰掛けてコーヒーを啜る。まずい…。レクイエムとは比べることさえできない。

「また説教か、柊。」

「指導です。白崎さん。」

聖君と入れ替わりに入ってきたのは、白崎さんだった。あまり説教と言う言葉は好きじゃない。あれは指導であり、私なりの優しさをもって聖君にエクスを使い方を教えている。今の所、適合者が彼しかない為、キッチリと私の指示に従ってもらわなくてはならない。そうだった、白崎さんに尋ねて置かないといけない事があるのよね…。彼なら知ってそうな気がする。

「白崎さん。先日のテラーの件ですが。…あのテラーを倒した存在についてどう思われますか？」

「私にも分からない。少なくとも、害のあるテラーは倒された。それは事実だ。」

確かにそれは言える。先週まで起こっていた、血を抜かれると言う一連の殺人事件。あれはテラーの犯行だった。そしてMB調査班の連絡で現場へ行ってみれば、不可解な行動をする新たなテラーがいや、あれをテラーと呼んでいいのかは分からないけど、人間ではない事は確か。憑依態の可能性もある。

「そんな事より柊。」

突然名前を呼ばれ、考え事から抜け出した私。ああ、私の悪い癖ね。考え事に嵌まり込むと、中々抜け出せない。

「エクストライバーと聖の姿が見当たらないが。」

あの、大馬鹿者が！私の許可なしにドライバーを持ち出したのね！…

「へへっ、ちよろいちよろい。」

無断で持ち出したエクストライバーを上着にしまい込み、俺は街へと繰り出した。悠姉さんツたら、説教の間歩き回ってるからな。俺がエクストライバーに手を伸ばしたのにさえ気が付いてなかったし。まあ、今頃ばれたかな？だが、俺だってエクス of 装着員だ。テラーの脅威から人々を守るのが俺の仕事、これはパトロールと言う真つ当な仕事に値する。ドライバーだって念の為に思っ

ただ。

「あつ。聖さん、今日は仕事休みですか？」

「よお御影。俺は営業で回ってる所。お前こそ休みか？」

「マスターから頼まれた買い物途中ですよ。」

よく働くねえ。俺には全然真似できない。俺の所属部署は調査班の連絡があつてからやつと動く。まあこの前の様に、現場検証にも参加する事があるけどな。基本は暇だ。だから毎日毎日悠姉さんの小言に付き合ってるのも、飽きて来る。

「買うもの大量にあるなら、手伝ってやるよ。仕事終わったから暇なんだ。」

「本当ですか？いやあ、実はそれなりにあつて大変だったんで助かります。」

「その代わり、お前の勤め先の喫茶店、えっと……レクイエムだったかのコーヒーとケーキ、奢れ。」

御影は苦笑いを俺に見せた。悠姉さんの小言を聞いているよりは、こいつの買い物の方がまだ。

しかも、ケーキとコーヒーがついてくるなら、もっと良い。

「もしかして、最初からそれ狙ってました？」

勿論だ。あの時は悠姉さんについてただけだが、あの味は今でも舌が覚えてる。

「分かりました。その代わり、しっかり持ってくださいよ？」

「契約成立ツと。」

こうして、俺の今日の間食のメニューは決まった。

「買ったな……」

「まあ、あのマスターですから。」

俺の両手には大量の袋が。もちろんの事、御影の手にも大量の袋が握られている。ケーキ欲しさに軽い気持ちで言い出した俺だが、あのまま街歩いてた方が良かったかも知れないな。

「レクイエムまではそう遠くないし、頑張ってください。」

御影の言葉を聞き流しながらも、俺達は歩く。その時だった。俺達二人の目の前に男達数人が現れた。

「聖剣二…。」

「お宅さん、誰？」

「昔お前のせいで迷惑を被った者だ。」

「聖さん、あなた何したんですか？」

「知るか。なん、一々覚えてられるかよ。」

だが、俺は目の前の男達の正体は検討が付いている。俺がエクスの装着員としてMBに入社する前にやってた仕事、トラブルバスターの時に関係があるに違いない。“迷惑を被った”と言うのは、俺がトラブルを解決した時に、何かしらの損害を受けたと言う意味だろう。つたく、逆恨みも程々にして欲しいぜ。

「それで、用事はなんだ？俺はこれからケーキの食べ放題に行くんだ。あまり暇じゃないんだ。」

隣で御影が“食べ放題じゃないんだけど…”とか言ってるが、この量の荷物だ。十分見合う見返りだって。

「恨みを晴らせろ。」

人の話を聞かずに殴りかかってきやがった！悠姉さんもそうだが、短気だな…。短気は損気だって習わなかったか？俺みたいにゆったりと構えるのが正しい。バックステップと体を捻る事で、殴りかかってきた奴をかわした。荷物を地面に置く。

「おい、御影。お前はさっさと帰れ。」

「でも、聖さんの身が危ないんじゃない？」

「大丈夫だって。」

俺から見れば、御影って奴は人を殴る所か、虫一匹殺せない様な外見してるからなあ…。それに、この数人なら俺一人で十分。買い物袋から卵のパックを取り出し、卵を相手に投げつけた。見事額に命中。割れた卵の白身が目に入って痛そうだ。

「警察の厄介になる前に逃げたらどうだ？」

「それはお前も同じだろうが。」

実を言えば、それについては安心できる。その手の方面に顔の広い俺は、警察関係の方にも顔が利く。そう簡単には逮捕されない自信がある。次々に襲い掛かってくる男達を、急所だけ狙って打ち倒していく。振り返り様に見えたのだが、御影がまだ逃げてない。どうした、腰抜かしたのか？

「はりやあぁっ！」

後ろから鉄パイプで殴りかかって来たのを、最小限の動きで避け、腹に膝蹴りを入れる。次の攻撃に備えようとした時だった。

「がつ！？」

男の一人が突然奇怪な声を出して倒れたのだ。その後ろに立っていたのは、遠巻きに見ていた男達の一人。そいつがニヤリと不気味に笑った。まさか…

そのまさかだった。そいつは姿を一瞬揺らめかせたと思えば、異形の姿に変わった。狼男？を彷彿とさせる姿、俺に攻撃を加えていた男達は悲鳴を挙げて逃げてしまった。まあ、この方が俺にとっても都合。あとは…

「おい、御影。逃げる。俺が何とかする。」

「聖さんは逃げて下さい。」

「いいから逃げろって言うてるだろ！死にたいのか！？」

「早く逃げてください！」

煩い奴だなあ…。人も殴れそうにない優男が、怪物相手に戦えるわけねえだろ。こっちとしても“エクスを装着する時に人に見られてはいけない”と、悠姉さんから耳たこになるまで言われている。

コレばかりは俺も遵守しようと心掛けている為、御影に見られる訳にはいかない。

「いいから行けっ！」

無理矢理どついて御影をこの場から離す。建物の角に消えた事を確認して、俺はエクスドライバーを出した。テラーが驚いた顔してやがる。

「それは！？」

「てめえを倒す、唯一の力だ。光の化身を目に焼き付けろ！変身！」
【XCE - ready】

【XCE Cariber - ready】
構えたエクスカリバーをガンモードに。俺は銃弾を雨あられとぶつけた。

聖さんに追い立てられる様に建物の影に隠れたが、早くしないと彼が危ない。さっきからバジユラが“テラーの匂いがする”って言うたから残ってたが…。

「バジユラ、準備はいいか？」

「当たり前だ。」

もう既に戦う気は十分みたいだ。

「『変身！』」

髑髏の口が開いて、赤の宝石を露出させる。闇が俺を包み込み、それが晴れた瞬間。ソウルとしての姿を現した。テラーに向おうと建物の影から出た時、ど肝を抜かれた。あの白い姿、この前の…。

「おい！何突っ立ってるんだ！戦うのか戦わないのか、はっきりしろ！」

「分かってる。少し驚いただけだ。」

剣でテラーを圧倒している白い姿。テラーと戦ってるから、仲間か？俺も白い戦士に加勢すべく、助走をつけてテラーを蹴った。突然の攻撃に吹き飛ばされたテラー。よし、十分勝てる。

「せいっ！」

突然背中に鈍い衝撃がかかる。地面に倒れ伏してしまった。

「追撃が来るぞ！」

バジユラの声に、転がって二回目の斬撃をかわす。

「お前はこの前のテラー！また同族殺しか！」

どうやら俺のことをテラーと勘違いしている。確かにバジユラは元々テラーだ。同族殺しと言っても過言じゃない。だけど俺達は人

を守る為に戦っている。

「話を…」

「聞くかあ！」

縦に、横に、斜めに。絶え間なく続く剣裁きを避け続ける。バジユラとこのスーツのお陰で、身体能力は確実に上がっている。しかし、こちらは素手、不利だ。この前みたいに地面に技をぶつけて逃げるか？ いや、テラーがいるこの状況ではだめだ。そう言えば、テラーは！？

「馬鹿め。」

逃げ去ろうとしている。このままでは罪のない人達が殺されてしまう。

「待て！」

テラーを追いかける。

「逃がすか！」

後ろから無数の銃弾を浴びる。あの剣、銃にもなるのか？

「お前に相応しい終焉だな。人間なぞに力を貸した裏切り者のな。」

「お前も逃がさない！」

銃弾がテラーを襲う。そのまま俺を飛び越えて、白い戦士がテラーに切りかかった。反撃の機会もなく斬られていくテラー。

「おい、俺達も留めを刺すぞ。」

「うん。」

前回の用に右手では無く、右足を闇が包み込み、必殺キックの用意を完了させた。そのまま戦士とやり合うテラーに突っ込む。

『闇に散らせ！』

途中でジャンプして、右足を突き出す。今ならテラーを！その瞬間、テラーと白い姿の立ち位置が逆になってしまった。あ、やばい！…だけど、止めることは出来ずに戦士の方にキックをぶつけてしまった。

「がっ！」

吹っ飛ばされる白い戦士。あ、ああ…。死んでない？テラーじゃ

ないから爆散は免れたという事？それともあの重厚な鎧の為？至る所から火花が飛び散ってスパークしている戦士。本当にごめん！

「てめえ！やつと本性表したな！」

「い、いや。今のは事故と言つか…」

「知るか！」

お返しとばかりにパンチを食らった。な、なんて力…。同じように吹っ飛ばされる。白い戦士はこちらを見て動けないと思ったらしい。今度は再び逃げようとしているテラーの方を向いた。

「まずはお前からだ。」

確実に殺気を纏ってる白い戦士。持っていた剣を眼前で構えた。剣のトリガーらしき部分を引くと、青い光が眩く輝き、剣に蓄積されていく。

「はあっ！」

剣で十字架を切った。すると、空中に青い十字架が現れ、一直線にテラーへと向う。逃げるテラーだが、十字架が背中から張り付いた。昔、罪人が十字架に貼り付けられた状態のようだ。完全に動きを封じられてしまう悪魔、これから起こる事を予測したのか、必死でもがく。しかし、戦士はどんどん距離を詰めていくのだ。

【X C E s l a s h - r e a d y】

電子音声が響くと同時に、白い戦士の剣が一際光り、振りかぶる。そして十字架に貼り付けられたテラーに振りおろした。

「やめてくれー！」

叫ぶテラーの悲鳴も無視し、光を纏った剣はテラーを切り裂く。爆発が起これと、その後には何も残っていない。テラーは完全に消滅していた。

『優一、立てるか？ここは逃げるぞ。』

「くっ…。」

白い戦士が背を向けている間に、俺は立ち上がりその場から逃げようとする。しかしだった…

「次はお前だ。」

振り返り、剣を構える白い戦士の姿がそこにあった。

第5話・三つ巴の戦い（後書き）

登場人物紹介

こくじろきゅうや
刻城 恭也

喫茶店レクイエムのマスター。48歳。

優一の父、英一の友人。ライダーシステム“ソウル”を英一と共に開発した。

常連客からは『マスター』や『恭さん』と呼ばれる。情報通でもあり、優一を様々な面で支える人物。

年齢の割に若く見える為、軽く見られない様に髭を伸ばしている。実はその辺のチンピラでは相手にならない位に強いらしい。

第6話：闇と光と一つの謎（前書き）

どうもハニーです。

久しぶりのソウル更新です。楽しみにしていた方（居るかな？）もそうでない方もお楽しみ下さい。

ちなみに今回バトルは少ないですし、あまり動きもありません。私の担当する回は毎度短い上に謎を残した感じで終わるので、そのしわ寄せがいくジャードさんに非常に申し訳ないです。

感想よろしくお願いします。

第6話：闇と光と一つの謎

「喰らえッ！！」

白い戦士の鋭い斬撃を俺達は必死に避けていた。まるで嵐だ、休ませる隙を全く与えない。

「クソッ、バジユラ！奴は一体なんなんだ！？」

優一がいつもの様に俺にアドバイスを求める。しかしいくら魔界で“雷帝”の名を欲しいままにした俺もこんな奴の事は知らない。ただ一つわかるのはコイツが『俺達を悪魔だと思っ^{テラ}ている』という事だ。

『わからん！だが奴は多分人間だ！この前みたいに目眩ましてもしろ！』

後手に回ってしまったこの状況では逃げる事も叶わない。他にも“殴る”や“蹴り飛ばす”などの選択肢も有ったが、優一はそれを良しとしないだろう。

「仕方ない、行くぞバジユラ！」

『おうよ！』

ソウルの右腕に力を集中させる。闇が腕を取り巻き、必殺の拳を地面に叩き込む。

「『ダークネス、ストライクッ！！』」

しかし拳が地面に突き刺さる直前、

「させるかアッ！」

白い戦士の剣が俺達に襲いかかった。

「ぐあっ!？」

衝撃で飛ばされ地面を転がる。斬りつけられた胸部の装甲はバチバチとスパークしていた。

「ぐう……強い……」

『おい!大丈夫か!?』

クソッ、どうやら思ったよりもダメージは深い様だ……。優一はフラフラと力無く立ち上がる……。

そんな中、白い戦士はゆっくりと近付いてきた。

「コレでとどめだ……!」

静かに、だが力強く俺達に終わりを告げる。右手に握られた剣の刃はさつきと同じように白い輝きを放っていた。

「うオオラアッ!!」

戦士が剣で十字を切ると、蒼い十字架が宙に浮かび上がる。

そのまま十字架は俺達に迫る!逃げようとしても逃げられない。優一が動けないからだ。

そのまま動けない俺達に十字架が貼り付き、さながらイエスの様に吊るし上げられる。

白い戦士は槍を構えたロンギヌスの如く、その白く輝く刃を振りかぶる。

どうやら逃げ場は無いようだ。

『…オイ、どうする。本気でヤバいぞ…』

俺は正直、本気で諦めて目を（無いけど）瞑ろうとしていた。しかし優一が口を開いた。

「諦めるな、バジユラ…！こんな時こそ目を開け、希望を見い出さんだ…！」

優一は弱々しくも力強く呟いた。

“希望”

英一もよく言っていた。そして、それこそが人間の強さであり、“魂”の輝き…！

……仕方ない、俺も前を向くか…！

『…ん？何だ…』

「どうしたバジユラ、何か気付いたのか!？」

『いや、試してみる価値は有るか……。優一！俺に任せろ!』

そう言う俺はソウルの全身を闇で覆う。

次の瞬間、白銀の刃とぶつかり合い辺りは爆発に包まれた。

▲ ▲ ▲

ドアの開いた音の直後にカランカランと小気味良いドアベルの音が響いた。

喫茶店レクイエム。鎮魂歌、そしてラテン語で“安息を”という意味を持つ。喫茶店としてこれほどピッタリの名前は無いだろう。

店は華美な装飾品も無く非常に落ち着いた雰囲気で纏められている。入り口の傍には小さな黒板が有り見事なチョークアートが毎回目を楽しませてくれる。

客席はカウンターに五席、三つのテーブルに四席ずつ。あまり多くは無いだろう。加えてあまり目立つ場所では無いし、積極的に宣伝をしている訳ではない。しかし不思議と客が居ないという日は無い。それはマスターの確かな腕や人当たりの良さを証明しているのだろう。

白崎真がこの店と出会ったのは偶然からだった。部下の柊悠に「おいしいコーヒーを出してくれるお店があるんですよ」と誘われたの

だ。

白崎は社内では“コーヒー好き”と“喋らない事”で有名だ。「白崎は旨くないコーヒーを飲むと全身から殺気を出す」という噂がある程なのだ。

そんな白崎だが今日レクイエムに来たのはコーヒーを飲むのではない。数日前から持つようになった疑念を払う為だ。

あれはエクスシステムの最終テストの日だった。システム装着者の聖が独断でカリバーを使った事で柊が怒ってしまった。

柊は怒りを鎮める為かレクイエムに来た。聖と白崎と共に。

白崎はそこで一人の青年に出会った。

——えっと…、名前前に聞いたんだけどな…。

——御影です。御影、優一。

名前は御影優一。

あの後、会社に戻った白崎は直ぐに御影優一に関する調査を始めた。家族から仕事先の事まで全てを調べ上げた。

御影という姓名。そしてそのアルバイト先の喫茶店レクイエムのマスター、刻城恭也。

この二つは白崎の中で一つの繋がりとなった。

今日はそれを確かめる為に来たのだ。

「おや、いらっしやいませ」

マスターの刻城恭也が声を懸けてくる。

白崎にはこの人の良さそうなマスターが、“あの”刻城恭也と同じ人物とは思えなかった。

「今日はお一人で？前と同じメニューで良いですかね…」

「今日は……確かめる事が有って来ました」

いかにも“喫茶店のマスター”といった台詞で親しげに声を懸けるマスターを無視して、白崎はゆっくりと話し始めた……。

第6話：闇と光と一つの謎（後書き）

今回はこんな感じです。毎度ですが変な終わり方です。ジャードさん本当にすみません。

感想以外でも質問も受け付けています。優一の好物とか剣二の過去とか本編に影響しない程度なら原案担当の私ハニーがお答え致します。

あとがきでやって欲しい事とかも募集します。

第7話：二度目の接触（前書き）

かなーり、更新が遅くなりました、ジャードです。

ホントに久しぶりの更新の為、初めて読む方が多いかも……ともかく、お楽しみ頂けたら幸いです。

何やら、今回も微妙な終わり方ですが…… rubixcubeさん、後は任せました（ちよつと待てや）

ともあれ、ソウル第7話、どうぞっ

第7話：二度目の接触

手応え、アリだ……。

俺……聖 剣二は、仮面の下で笑う。

やっと倒せた。

正直……同族殺しとはいえ、奴はかなり危険だった。他のテラーとは違う……何かが。

いや確かに、他のテラーと比べて力も強かった気がするが……ソレじゃない。ソレ以外の何かだ。

ま、倒した今になっちゃ、どうでも良いか……

そう思い、必殺技の影響で巻き上がっている煙りを払うと……

「……何ッ!？」

共学した。あ、間違えた、驚愕した。

いや、ふざけてもいないと混乱しちまうんだ。

何故なら……エクスカリバーの刃は、テラーではなく……黒い何かに阻まれていたからだ。

「何なんだよ……コレはッ!？」

力いっぱいカリバーを押しても、再び離して振るっても、びくともしない。……こりゃ、ホントに何!？」

いや、落ち着け。俺は誰だ？そう、聖剣二だ。俺だって人間だ、混乱だってする。そうだ、落ち着け……。

そう気持ちを鎮めている内に、その黒い何かは消える。
そして、あのテラーの姿が現になった。

筈だった。

「……なんでッ!？」

テラーの姿が、消えていたなんて……思いもしなかったのだが。

……って事は、奴を倒したのか？いや、有り得ない。さっき、黒い何かに剣が阻まれていた。

……ソレか！

あの隙に、テラーは逃げたのか!!

「……クソッ!！」

うわっ、まさか……逃がすという結果になるなんて……。今から追っても、多分間に合わないだろう。

そう思い、エクストライバーを外す。それに伴い、俺を覆っていた鎧も消えていく。

今日は此処までか……逃がしたっていうのは、かなりイタイな……。と、そう言えば御影は何処だ？

まさか、逃げたッ!?

馬鹿な、ケーキ食い放題が……ケーキ食い放題が、逃げ出すなんてッ……!?

いやまあ、逃げるように言ったのは俺だけどさ……せめて近くで待とう、とか考えなかったのかよ……あ、だから中々逃げなかったのか!?

何がどうあれ、まさか、こうも逃げられまくる事になるとは……。

今日は厄日だな、チクショウ……。

いや、多分、今日の不幸は使い切った。今度から来るのは幸せに違いない。

そうだ、ポジティブに行こう。ポジティブに行くんだ聖剣二。ポジティブに行けば……

「……ひいじいりいこうん?」

ソワリ。

物凄く……物凄く背中に寒気が走ったぞ、今。

マズイ、コレはマズイ。よし、1、2の3でダッシュだ。さもなくば、俺に一生幸せは訪れない。

1、2 n

「今日という今日は許さないわよおっ!!」

「あいたあッ!?!」

遅かった。本当に一足遅かった。

走り出そうとした瞬間、俺のナイスヘアがグイッと引っ張られるなんて、誰が予想したか。

「痛い痛い痛い！？少しは加減してよ悠姉さん！？ていうか、何時からいたの！？」

「たった今よ。テラーの目撃情報が入ってね……それより、説教中にぬけぬけと、オマケにエクストライバーを持ち出して抜け出すなんてねえ……？」

「ちょ、悠姉さん！？エクストライバーは念のためだって！現に、テラーを倒したんだから！！」

「ソレとコレは話は別。」

「悪魔ああッ……！」

俺の叫びも虚しく、ズルズルと悠姉さんに引きずられていく。
誰か……元同業者がいたら、このトラブルをどうにかしてくれ……。

▲ ▲ ▲ ▲

人通りの少ない路地裏。マンションとかで影ができて、上手く姿が見えないような所。そんな場所で、俺は息を切らしていた。

「……下手したら、死ぬ所だった……。」

『やはり、俺の勘は正しかったか……フツ、流石俺。流石バジユラ様。』

「いや、自惚れてないでさ……何に気付いたのかくらいは教えてくれよ。」

自画自賛をしているバジユラをジト目で睨む俺だが……バジユラはソレを軽くスルーし、「ああ。」と……人間の姿でだったら頷いてたんだろうな……ともかく、俺の質問に答えた。

『お前がバツカバツカ奴の攻撃を受けてくれたから分かったんだがな。』

「……腹立つな、その物言い。てか、余計な事は言わなくて良いから。」

ふざけた内容を話し出すものだから……半分聞く気を無くしつつも、話を促したが。

その答えは、以外なものだった。

『奴の力の源……エネルギーは、俺達とは真逆だったんだ。』

「……つまり、どういう事だ？」

『奴を<光>とすると、俺達は<闇>……お互いのエネルギーは、相反するものだったって訳だ。で、ソレにいち早く気付いた俺は、全身に闇を纏わせて……奴の攻撃を防いだ……というより、弾け合っただけって言うべきだな。』

光と、闇。真逆……相反しあうエネルギー。

俺のあの姿と、あの白騎士は……対称的な存在という訳か。

だからこそ、気になる。

俺達の他に、テラーを倒している人間……いや、組織が存在するのか。

疑問に思いつつも……答えが出る訳でも無かったのだが。

だからといって、あの場所にずっといると怪しい人物に思われそうだった為、建物の物影に置いて来た買い物袋を持って、レクイエムへと戻っていた。

……まずいな、聖さんのせいで卵が少し犠牲になってしまった。恭さんには……なんとかしてごまかすしかない。いや、無駄だと思うけど。

……そういえば、聖さんはあの後何処へ行ったんだろうか？

「……只今帰りましたー……ってアレ？」

……正直、ちょっと呆然した。

レクイエムの入口を潜ると……ほぼ同時に、中から白崎さんが出て来たのだから。

「あ、えーっと……お帰りですか？」

「……………」

だが、白崎さんは黙ったまま、レクイエムから出て行く。……相変わらず怖いなー、無言の圧力。

とはいえ、ジッと眺めるのは失礼だ。視線を、恭さんへと定めたが……。

「…………恭さん？」

恭さんはいつに無く暗い……というか、考え込んだ表情で座っていた。

いつも人当たりの良い恭さんにしては……珍しい。

「…………どうかしたんですか？」

「優一君……それと、バジユラ。君達に……話しておかなきゃならない事があるんだ。」

いつになく真剣な表情の恭さんを見て、思わず背筋を伸ばしてしまう。……それほど大事な事なのだろうか？

だが、恭さんの口から出た言葉は……俺にとっては予想外の内容だった。

第8話：秘密（前書き）

久しぶりすぎて全然書けません。

第8話：秘密

「優一君、それとバジユラ。君達に、話しておかなきゃならない事があるんだ。」

そう言った恭さんの表情はこれまで見たことがないくらいに険しかった。

いや、ただ険しいだけじゃない。どこか追い詰められている様子にも、苦しんでいるようにも見える。

「恭さん？」

「そこに座ってくれ、優一君」

そう恭さんは自分の目の前のカウンター席を示す。

（逃げられない、これはきつとんでもなく大切な話だろう）

どこか本能的な部分でそれを悟った俺は、言われた通り恭さんの前の席に腰掛けた。

俺が席に着くと、バッグの中から器用にバジユラが出てくる。

さすがのバジユラもこの張りつめた雰囲気を感じたのだろうか、押し黙っている。

「優一君。君はお父さんの事を知っているかい？」

恭さんの質問は思いもよらなかった。

というか『何故今更そんなことを尋ねるのだろうか？』という様な、不思議な質問だった。



恭さんが言うには、俺の親父は考古学や民間伝承、特に世界各地に残る悪魔伝承に関する歴史を研究していたらしい。そしてある事実にたどり着いた。

それこそが悪魔^{デラ}の存在である。

「悪魔は実在する。悪魔たちは私たちの近くに存在し、エサである人間の魂を常に狙っているのだ」

それが親父が研究の末に行き着いた結論だった。

だがそんなこと学会や世間に受け入れられる筈がない。

結果、親父は異端の汚名を着せられ学会から追放されたのであった。

しかし親父の説は間違っではない。それは今の俺たちが証明できる。

そう。いかに罵られ谤られ、泥を投げられようと、それが真実である限り何かを誰かに伝えるのだ。

学会からは追放された親父であったが、親父の説に目を付けたものがいた。

それがmedical being。その名も高い大企業である。

どうやらmedical beingという企業は“本当の事”を知らない一般人の目を欺く為の表の姿であり、実際の所は、遙かな過去から人間を悪魔^{デラ}の魔の手から守ってきた存在らしい。

追放された親父はそこに拾われ研究員として働くことになり、そしてそこである人物と出会った。

それが当時、対悪魔用戦闘スーツの開発チームリーダーをしていた刻城恭也。

つまり今俺の目の前に居る、このマスターだというのだ。
しかしある時、事件が起こった。

スーツの実装テスト中の事だ。

制御機関の不具合による暴走、それによる装着者の死亡。最悪の結果だけを残し、それ以降スーツの研究・開発には終止符が打たれた。

その後、そのスーツのデータと共にシステムごと研究員二人が失踪した。それが、親父と恭さん。

全く……、信じられない。親父や恭さんがそんな事に関わっていたなんて。

「恭さん、もしかしてその時のスーツって……」

「そうだよ。当時問題となったのはスーツの制御機関だ。どんな人工知能をもっても完全な制御は不可能だった。ちょうどそんな時さ、僕たちがバジユラと出会ったのは」

『俺が身体を失って物質界に逃げ込んできた時のことだ。お前の親父と恭也こいつに出会ってな。まあ色々あったんだが、俺はあいつに協力することにした。身体を失って弱い立場にいた俺を匿うことを条件に、未完成なスーツの制御機関になって同族殺しをやってやるってな』

カウンターの上でカチャカチャと顎を鳴らすバジユラ。

恭さんもどこか懐かしそうな表情だ。

「だから私たちはmedical beingを辞めた。悪魔テラーを討つはずの組織が悪魔を使うのは間違ってるからね」



「これは……」

medical being 社内の資料室。柊悠はそこにいた。

エクスと戦った闇を操る角の悪魔に感じた違和感。^{テラー}

エクスを傷つけまいとするような戦い方、それに悪魔に憑依された人間も命に別状はなく、ただの悪魔ではないように思えてならない。^{テラー}
……いや、そもそも“アレ”は悪魔なのか？

それを確かめる為にここにやってきた柊だったのだが、そこで思いもよらぬ物を見つけてしまった。

「『S - project』？」

データファイルとして纏められていた資料を開く。

そこには『S - project』に関する概要が纏められていた。
もちろんそこに関わった人物の名前も。

「エクス以前にも対悪魔用スーツが開発されていたの……？ それにこの名前、刻城と御影って……」

その名前に思い当たるのが二人。一人は彼女の行きつけの喫茶店のマスター。

そして“御影”と言う名字。

『御影です。御影、優一』

レクイエムで働くあの青年。彼の顔が思い出される。
そこで柊は思っ。

（まさか、彼ってその研究員の……）

“まさか”

そう感じながらも拭いきれない疑問、好奇心。

ゴクリ、と悠は唾を飲んだ。柄にもなく緊張しているらしい。

『御影英一』と記された名前、そこをクリックして開けばこの疑問も好奇心も晴れるはずだ。

意を決してファイルを開く。

「柊」

不意に背後からの声。重みと威厳に満ちた声だ。

悠は驚いて思わず小さく悲鳴を上げてしまった。

振り向いて見れば、自らの上司である白崎が無言でこちらを睨めつけていた。

ここでも白崎の放つ無言の圧力というのか、独特の雰囲気吞まれてしまう。

「あまり過去を詮索するんじゃない……」

「す、すみません……」

何故だろうか。

白崎に諫められると、自分が途端に悪い事をしたように思えてきてしまう。

今回も自分が好奇心に流されてしまったことに強く心が痛むのだ。

「まあ、いい……。その事については、私から直接話そう」

彼の背中が“ついて来い”と物語っている気がして、悠は白崎の後

ろに従った。

いつものオフィス、珍しくも聖がキチンと座っている。悠も自分に与えられた椅子に座る。

みな押し黙り、漂う重い雰囲気。

それを破ったのは誰あろう白崎であつた。

「柊は、独自に調べてもう知っているだろうが、エクスが開発される以前にも、対悪魔用強化スーツは開発されていた。『S - p r o j e c t』と名付けられたその計画は、最悪の形で幕を下したがな……」

淡々と語る白崎。だが、悠には引つ掛かる所があつた。

大切なのは別な部分。未完成なその強化スーツを持ち出した人物の
はず。何故それを言わないのか。

「白崎さん、大事なものは強化スーツではなく、その関係者……」

「ああ、そうだな柊。だが私もまだ整理がついていない」

白崎はそのままオフィスを後にしてう。背後に漂う哀愁の雰囲気が
柊はいたたまれなく感じられた。

オフィスを出た直後、テラー出現を知らせる知らせが入った。

エクストライバーを掴んで風のように走り去る聖を追って、柊もオフィス
を後にした。

推測。そして胸騒ぎ。

柊の胸中に暗い影が落ちる。

「（あのデータが本当の物なら……あの中には人間が！？ 聖君を
止めないと、人間同士で殺し合いがはじまっちゃう……ッ！）」

第8話：秘密（後書き）

変な感じに終わってしまいました。
ジャードさん、申し訳ありません。よろしく願いします。

第9話：駆ける闇と光（前書き）

M A S K E D R I D E R S Y S T E Mの二番手。更新頻度が最も悪で定評のあるユーザー・ジャードであります。さー。

久々にこちらを手掛けた訳ですが、以前の自分の書いたヤツを見ると凄まじく恥ずかしくなります。おい、こんな文よく晒せたよな。原作者のハニーさんに失礼だろ。今も酷いけどさ。

まあ、こんなガキでも一応成長しちゃいるって訳です（キリッ

↑

そんな戯れ言はともかく、本編へどうぞ。

第9話：駆ける闇と光

……信じられない。

それが俺・御影優一の精一杯の一言だった。

あの温厚なマスターである恭さんが対テラー用の戦闘スーツを、親父と一緒に製作していた？ 大分前に「一緒に研究していた」なんて話は聞いていたけど、なんというか……恭さんのイメージに合わないというか。失礼も承知だけど。

そんな事を考えたながら、再び口を開こうとする恭さんを遮るかの如く、バジユラがカチャカチャと音を立てながら叫んだ。

『……優一、テラーだ！ この気配、こりゃ多分町中だぜ！？』

「ッ！？」

町中？ マズイだろ、危険で騒ぎじゃない。下手すりゃ被害者が大勢出て来る。早く行つて……また白騎士と遭遇するかもしれないけど、そんな事も言つてられない。

恭さんに視線を移すと、恭さんも黙つて頷く。それを了承の意として受け取った俺は、バジユラを手に喫茶店の外へと駆け出した。

「いつて！」

「キャッ！？」

『ぶぎゅっ！？』

……筈だったけど。

入り口で俺とは逆に店内に入って来る筈であっただろう女性と、思いきりぶつかってしまった。思わず俺はその場で尻餅を付いてしまった。ちなみにバジユラは、ぶつかった拍子に俺の手から離れ、俺の下敷きとなってしまった。変な声を上げてたけど大丈夫なのか。

ちなみに黒いロングヘアを首の辺りで結んだ俺より歳上の女性は、多少呆然とした様子で俺を見詰めていた。

……いやいや、こんな事をしている暇は無いんだよな。

「あ、優一君。大丈夫？」

「あ、大丈夫です星崎さん。すみません、急いでるんで……行くぞバジユラ」

『オイ優一……お前後で覚えとけよ』

再びバジユラを手にとって、店の近くに置いてあった自転車に跨がり、バジユラを自転車の前方に設置された籠へ放り込む。そのまま勢い良くペダルをこぎ、自転車を発進させた。

町並みが早送りのように擦れ違っていく中、ふと恭さんの話を聞いて浮かんだ一つの疑問をバジユラへと投げ掛けてみる。

「一つ思ったんだけど……まさか前の白騎士って、恭さんが言っていたとこの戦闘スーツなのか？」

『可能性としては高いな。あの時からもう大分経ってる。もしかしたら、既にスーツを完成させたんだろうな』

へえ、と返事しながら白騎士の姿を思い返してみる。青い宝玉の収まったベルトを身に付け、純白の剣を振りかざす謎の白騎士。自身を……あの姿をテラーと判断して襲ってきた戦士。

正直、白騎士は強かった。あの力を使いこなしていた人も、相当凄いいんだと改めて痛感する。

「……また、会ったろうな」

『今度は逃げられねーだろうな。気を抜くな、アイツは……なんか話を聞きそうに無い』

苦笑いしながらも、自転車をこぐ足を早める。バジユラのセリフは、冗談なんかではない事は解っている。また会えば、確実に戦闘になる。人間同士の、殺し合いだ。なんとかして話をつけたい。叶うかどうかなんて解らないが、とにかくそう願う他無かった。



普段ならば、買い物客等で賑わう町中。お昼や夕飯の食材を買い求める主婦や、我先と言わんばかりにオモチャ屋へと駆け込む子供達の姿が見られるそこでは、人々は何かから離れるように一斉にその場から逃げていた。

いつもなら笑顔が絶えないそこで、主婦達は顔を恐怖に染め、子供達は泣きわめきながら走っている。否、ある場所から離れている。その様子は、まるで人で出来た波のようだ。

その波の中へと突っ込む青年が一人。

「はいはいはい、ちょっとごめんよ!」

おちゃらけた様子で、それでも何処か真剣味を帯びた表情で。

聖剣二は人混みを掻い潜りながら、人々が離れる場所へと向かって
いた。medical beingでのアナウンスが告げていた場
所が、まさかの町中だった。

人の多い此処で今まで反応が無かった事を考えると、今回の悪魔は
恐らく憑依体だろう。人間に憑依してたからか、反応が少し遅かつ
たのかもしれない。十字架のピアスを揺らしながら、聖は彼なりに
推察する。

……そういえば、悠姉さんはどうしたのだろうか。聖はふと振り返
るが、視界全体に広がるのは雑踏のみ。悠姉さんこと柊悠とは、ど
こかではぐれてしまったのだろうか。

悠の事を思い出すと同時に、先程の話もうつすらと頭に浮かび上が
る。白崎が話していた、エクス以前の強化スーツ。少し興味があつ
たが、今は存在しないような口振りだった白崎の様子を見て、半ば
自分には関係無いと割り切った。

思考を止め、改めて前を見る。気付けば、既に雑踏から抜け出して
いた。

道を真っ直ぐ駆ける。アナウンスで告げられたポイントへと近付い
てくると、段々と錆びた鉄のような臭いが風に乗って漂ってきた。

その臭いの意味を良く知っている聖は表情を引き締める。

異臭の元は、直ぐ近くの十字路を左。そしてそこは、アナウンスで
告げられたポイント。

そこは何処にでもある繁華街。人々が賑わい、多くの商店が並ぶ場
所。白い綺麗なタイル張りの道が真っ直ぐ突き出ている。

だが、今はそこには“生きた人間”がない。商店で並べられてい
る多くの商品は赤い液体で汚れている。白いタイル張りの道も赤い

液体で汚れ、その上には“ナニカ”が多く転がっている。それらは“人間だったモノ”……死体だった。死体は既に原型を留めておらず、赤い液体……血や肉片を撒き散らしながら、そこらじゅうに撒かれている。言葉にするのも躊躇われるような光景。

まさに地獄絵図だった。

その地獄絵図を作り出した張本人は、散りばめられた屍の中心に立っていた。屈強な身体を持った一人の男の右手には、人の足が握られている。その足に繋がっているのは下半身だけで、上半身は引きちぎられたのか、すぐ傍に空を仰ぎながら沈黙していた。引きちぎられたところから臓物もろもろが出ていたが、聖はあえてソレを視界に入れなかった。確かに今までこのような光景は幾度か見た事はあるが、見た事があるとはいえ慣れるようなものではない。

事の元凶は人間の下半身を放り棄てながら、意外そうに目を細めて聖を睨む。

「ああ？ 珍しいな、無謀な人間がまだいたか」

「悪いな。俺はただの人間じゃないんだよ、悪魔^{テラー}！」

聖の言葉を聞いた瞬間、男……否、人間へ憑依した悪魔はさも愉快そうに豪快に笑いだした。その笑い方は、案外憑依された人間と妙にマッチしている。

「ただの人間じゃねえ！？ て事は、テメーが報告で聞いたバジユラと組んだ人間かア！？」

「……バジユラ？ 組んだ？」

「なんだ、違エのか」

聖の訝し気な声を聞いた途端、悪魔は態度を一変させ不快な雰囲気
を醸し出す。首をゴキゴキと鳴らしながら、かなり気怠そうにゆっ
くりと近付く。

「ただの命知らずの人間か、面倒臭エ……おい人間。此処に来たか
らにや、マシな死に様晒せるところだよ」

「言つたろ……俺はただの人間じゃ無エって」

不敵な笑みを浮かべながら、聖は何処からか取り出したベルトを腰
に巻き付けると、バツクルに当たる機械に設けられたサイドハンド
ルを一気に引く。

「変身！」

【XCE - ready】

機械に収められた青い宝玉が露になり、光り輝く。光は聖の身体を
包み込み、やがて白いスーツへと変質する。その上から重厚な鎧が
更に身体を覆っていく。やがて顔を仮面が包み、複眼がギラリと輝
いた。

白を基調とした騎士にも似た姿。仮面から伸びる一本角は、さなが
らカブトムシのようだ。

medical beingが誇る対悪魔用強化スーツ・エクス。

一連の動作を眺めていた悪魔は、聖の変身した姿を見て再び豪快に笑いだした。

「そうか、お前が仲間が言ってた白い奴か！ 面白エ……その力、見せてみるよ！」

悪魔はその姿を揺らめかせ、本来の姿を見せ付ける。憑依した人間のものより一回り程大きくなったその巨体は、さながらゴリラのようだった。

太い腕を思いきり振り回し、近くの建物にわざとらしく当てる。建物の壁がまるで豆腐のように呆気なく碎け、血に濡れたタイル張りの路面に崩れ落ちた。

「……地味にデカイ上に何だあの馬鹿力」

「この人間共のようにには殺さねえよ……じっくり、いたぶってやるウツー！」

「だから、簡単に殺されるかっての！」

【XCE Caribber-ready】

エクスへと変身した聖は、剣銃一体型の武器・エクスカリバーを起動。銃の状態のソレを前へ突き出し、襲って来る悪魔へと銃弾を放った。

第10話：魔龍覚醒（前書き）

初めまして、MASKED RIDER SYSTEMの新メンバーにして新三番手、タスクと申します。以後お見知りおきを。

一人称視点主体のものは経験薄でしたので少々戸惑いましたが、どうにか形にできました。

チームの一員として精一杯やっていきます。

さて、僕の事はここまでにしておきまして、本編へどうぞ。

第10話：魔龍覚醒

「あきらさん。すみませんが、少し店を頼みます」

優一君がバジユラと共に出て行った後。私は着替えを終えたパティシエ、星崎あきらさんに断って、店の奥へ向かう。

「はい。お任せ下さい」

首の後ろで結んだ黒髪を揺らして微笑むあきらさん。その頬笑みに頷き、私はドアを潜って奥に入る。

私は右手側にある鍵をかけたドアを開けると、その奥へ続く緩やかなスロープを下って電子ロックをかけた扉に向かい合う。

その扉を開けた先には、地下へ掘り下げられた無機質な空間が広がっている。

穴の開いた鋼板の坂を下りたその先。工具や部品の広がるその中心、シートに覆われた物体が静かに佇んでいる。

そのシートに手をかけながら、私は先日白崎の訪問を思い出していた。

▲ ▲ ▲

「今日は……確かめる事が有って来ました」

店に入るなり、白崎は眉間にしわを寄せた険しい顔をそのままに、切り出した。

「お久しぶりです、刻城さん」

そう言つて深々と頭を下げるその姿は、今の彼のそれではなく、かつての彼を思い出させた。

それに吊られたのか、私の脳裏にはかつての苦い事件が蘇る。

今思えば、あの時の私の顔は、“喫茶店レクイエム”のマスターの

物ではなくなっていたのだろう。そう、今責任者を務めている白崎のような顔に。

「ああ、本当に久しぶりだ。もう10年近くなるのか……？」

かつての調子で応えた私に、彼は顔を上げ、顎を軽く引いて頷いた。「そうですね、本当に懐かしい。どうせなら酒でも飲みながら昔話といきたい所ですが……」

▲ ▲ ▲

「フウ……らしくないな」

私は呟きながら首をゆっくりと左右に振り、先日のことを振り払う。そして力を込め、一気にシートをひきはがす。

シートの下から現れたのは、黒いロードスポーツタイプのバイク。鋭い流線を描くフロントカウルは、竜の顔を模したもの。

「ヴリトラ」

私がソウルの為に開発したマシン・ヴリトラ。しかし私が名を呼んでも、黒い車体と、その内に宿った魂は何の返事もしない。

「まだ、目は覚めませんか」

そう、このマシン・ヴリトラは、我々の同志バジューラと同じ。悪魔^{デラ}の魂を宿した悪魔を討つための力。

バジューラがこちらへ逃げ込んできた時、彼は一人ではなかった。彼と同じ様に、いやそれ以上に、魂までもが砕けんばかりに傷ついた仲間を伴っていた。それがこのマシン・ヴリトラに宿った悪魔、ヴリトラ。

魂だけの存在となっていた彼には、開発中のサポートマシンの制御機関を担当してもらうことになったものの、逃走中のダメージが元で、彼は深い眠りについてしまった。

ソウルに続いて、ヴリトラの車体は完成を迎えた。だがその魂は未

だに傷を癒す為に眠ったままだ。

「しかし、悪魔^{デラ}と戦う優一君の為に、これ以上眠っていてもらうわけには……」

私は呟きながらヴリトラの黒いカウルを指で撫でる。

その瞬間、ヴリトラの車体が低い唸り声を上げて震えはじめる。

「これは……!？」

不意の振動に私は思わず手を放してしまう。徐々に唸り声を高め、振動を強めるヴリトラ。やがてその周囲の工具や部品が浮かび上がり、黒い粒子へ分解される。

胸元や袖を止めるボタンが粒子化される中、私は急いで唸り続けるヴリトラから離れた。すると、ヴリトラの周囲を渦巻いていた黒い粒子がその両目の上に集って、鋭く前へ突き出した一對の黒角を形作る。そしてヴリトラは角の下にある目を輝かせ、一際大きな唸り声を上げる。

「! そうか!」

その咆哮に、私は急いで壁に駆け寄り、そのコンソールを操作する。

連続の打鍵の締めくくりに、強くキーを打ち込む。直後、地下室の一角にあるシャッターが音を立てて上がっていく。そしてヴリトラは機首を開かれた出口へ向け、二つの車輪を床を削らんばかりに回転させる。その回転の勢いに乗って、ヴリトラは外へ向けて駆け出した。

「頼むぞ、ヴリトラ」

小さくなるテールランプを見つめながら、私は無人の地下室で呟いた。

▲ ▲ ▲

「ハッハア！ 痒いぜオラアッ！！」

悪魔は俺の撃った銃弾の中を、丸太のような太い腕を盾にして突っ込んでくる。

「って、マジかよ！？」

カリバーの弾丸を真正面から受けているのに、悪魔はまるで気にした様子もなく突っ込んでくる。そのまま目の前まで迫った巨体に、俺はとつさに横へ飛ぶ。

「グッ！？」

突進の勢いに煽られながら、俺はエクスカリバーを持った右腕から前回りに受け身を取って、右腕を振る勢いに乗せて腰を捻る。

「こなくそッ！！」

そして銃口が悪魔の背に重なった瞬間に連続で引き金を引く。銃口で弾ける光の向こうで、ゴリラ野郎の背中で爆発が起こる。

「ガッ！？」

銃弾の直撃に声を上げて体をよじる悪魔。

「効かねえってわけじゃないみたいだな」

最悪剣モード一本でやるしかねえかもと思ってただけに、こいつはありがたかった。そのまま首の後ろや腰を重点的に狙いながら、俺はカリバーの引き金を引き続ける。

「ガ！ ぐあ！？」

俺の射撃にゴリラ悪魔が声を上げ続ける間に、俺は膝を伸ばして姿勢を整える。

「このまま仕留めさせてもらうぜ」

カリバーの射撃で動きを封じながら、俺は間合いを詰めていく。そして必殺の間合いへ踏み込み、カリバーを剣モードへ切り替える。

「なあめるなあ！！」

「うわッ！？」

だがモードチェンジの隙に、悪魔は岩みたいなかい握り拳で足元のタイルを碎き飛ばしてくる。

ショットガンみたいな石に、俺は思わず怯んでしまった。

「ハッ！？」

慌てて顔を上げた時には、目の前に巨大な右拳が迫っていた。

「クッ！」

とつさに頭を下げ、拳を潜り抜け、右の爪先を、悪魔の腹に叩きこむ。

「軽いぜ！」

しかし俺の蹴りは分厚い腹筋に跳ね返されてしまふ。そうして足のもつれた所を狙って、丸太みたいな腕が二本、空気を割る様な勢いで迫ってくる。

「グウ……！！？」

俺は右腕を盾にして、自分から飛ぶことでダメージを出来る限り減らす。地面を何度も転がって衝撃を殺し、左腕で地面を叩いて起き上がる。

「馬鹿力が……！！」

未だに痺れる右腕を抑えながら立ち上がる俺。対してテラーは口の端を歪める。

「その白い鎧ごとまっ平らにしてやる！！」

そして右、左の順番で胸の太鼓を鳴らして突進してくる。

「チイツー！！」

俺はエクスカリバーを銃モードへ切り替えると、左手に持ち替えて引き金を引く。

「バカが！ 効かねえんだよっ！？」

悪魔野郎は両腕で銃弾を防ぎながら、真直ぐに俺に向かって走ってくる。だが俺は構わずに引き金を引き続ける。

「この脳筋悪魔が……！！」

自分の腕で視界を遮って突っ込んでくる悪魔。その突撃を十分に引き付けた所で、俺は右のサイドステップでかわしてすれ違いざまに光の弾丸を叩き込む。

「ッア！？」

左のこめかみから煙を上げて、足をもつれさせる悪魔。倒れかけて

踏ん張る広い背中に向かって、俺はエクスカリバーを剣モードに切り替えて振りかぶる。

「おおお！」

気合を込めて振り下ろした剣は、振り返りかけた悪魔の左腕を深く切りつける。だが悪魔は切られた左腕に構わず右の拳を突き出してくる。

「うおらあー！」

タイル張りの地面を削りながら、掬いあげるように突き出される右拳。俺はそれを足で踏み、その勢いに乗って大きく後ろへ飛ぶ。

着地と同時に、右腕に残った痺れを払いながら構え直す俺。対してゴリラ悪魔は俺の切りつけた左腕をさすりながら、首を鳴らす。

「やるじゃねえか、白いの。楽しくなってきたぜエ」

口の端を歪めてそう言う悪魔に、俺はカリバーをようやく痺れの抜けてくれた右手に持ち直して構え直す。

「そうかよ？ 俺はそろそろ飽きてきたけどな」

やる気になってる悪魔の野郎には悪いが、この馬鹿力とこれ以上戦うのは嫌だ。割と本気で。

▲ ▲ ▲

「あれは……！？」

『もう始めてやがったみたいだな、優一』

構えを取って向かい合う白騎士と、ゴリラみたいにでかい悪魔^{デラー}。その姿を見て、俺とバジユラは建物の陰に身を隠す。

周りに人の気配はすでになく、ぶつかり合う殺気の余波がざわざわと俺の横を通り過ぎていく。

『どうする、優一？ 今から乱入しても面倒になるだけだぞ？』

俺の手の中で顎を鳴らすバジユラ。その言葉には正直、俺も同感だ

った。今割って入っても白騎士はこちらに襲いかかってくるだろうし、前みたいに悪魔を倒すどころか、逃がしてしまうかもしれない。「まだ、様子見かな……」

『それがいいな』

あの白騎士、話は聞かないけれど实力は折り紙つきだ。テラーに集中してくれた方がいい。

バジユラの賛成も得たところで、俺は物陰から顔を出して白騎士と悪魔の様子を覗き見る。

お互いに隙を探っているのか、僅かに円を描くように位置をずらしながら睨み合っている。そこで不意に、悪魔の眼が僅かに余所を見た。

悪魔が何を見たのか気になって、その先を辿ってみる。

「な！？」

そこには、地面に座りこんで泣きべそをかいてる小さな女の子の姿があった。

慌てて白騎士を見るけれど、彼はまるで女の子に気づいた様子がない。それを見て、俺は決心を固めた。

「バジユラ、様子見はやめだ」

『お、おい、優一！？』

戸惑うバジユラを無視して、腰に押し当てる。腰から昇って来るベルトが固定された感触。

「変身！！」

俺は叫び、バックルのサイドハンドルを引きながら物陰から飛び出す。

バックルにあったバジユラの口が顎が外れたかの様に開いて、その奥にあった紅の宝石が露わになる。そして俺の体を影が包み隠す。

『ああもう！ 変身！！』

続いて、半ばやけくそ気味に叫ぶバジユラ。それに応じるかのよう
に、ベルトの宝石が一際紅く輝く。

「なッ！？」

白騎士の物か、悪魔の物か、どちらともつかない驚きの声があがる。そんな中、俺を覆っていた影が弾けてソウルへと変わった俺の姿が露わになる。

額から伸びる二本の角。悪魔や鬼を思わせる厳めしい仮面。黒いボディに、動きやすさを重視したシンプルな鎧。それが俺の戦う姿。悪魔を討つ悪魔、ソウル。

「あいつ!？」

「チッ! 裏切り者も来やがったか!？」

女の子に向かって跳ぶ俺の後ろで、白騎士と悪魔の声がする。俺はただ泣きじゃくる女の子の側へ飛びこみ、その体を抱き抱える。

「キミ、大丈夫!？」

「え?」

両腕で抱えた女の子に呼びかけながら、怪我をしていないか確かめようと目を向けようとする俺。しかし、そこで俺の耳を重い足音が叩く。それに弾かれる様に顔を上げれば、両腕を振りかぶって駆けこんでくるテラーの姿があった。

「メスガキもろとも、死ねえ!!」

「ッ!」

俺は女の子をしっかりと抱えて、右へ転がる。起き上がったところを狙って、追撃の拳が迫る。

「ハアッ!」

俺は膝を伸ばして、巨大な拳を跳び越える。そして空中で前周りに一回転。悪魔の頭を踏んでさらに跳んだ。

「が!？」

足元に悪魔の声を聞きながら、女の子が十分に逃げ出せる距離まで離れようと飛ぶ俺。

「させるか!」

「ぐあ!？」

だが俺の周りに火花が弾けて、背中を鋭い痛みと衝撃が焼く。俺は背中を撃つ痛みバランスを崩して、そのまま落下する。

この子を傷つけるわけにはいかない。俺は背中 of 痛み に仮面の下で顔をしかめながら、体を女の子の下敷きになる様に捻る。

「ぐ……！」

さっきの物とは違う背を撃つ痛み に呻く俺。

「俺が戦つて居る隙にその子を攫うつもりだろうが、やらせるかよ！？」

女の子を抱えて倒れる俺へ、白騎士が銃口を俺に向ける。引き金に掛った指に力がこもるのを見て、俺はとっさに白騎士に背中を向けて、女の子を体の陰に隠す。直後、再び背中を激痛が襲う。

「あ、ぐう！？」

『優一ッ！？』

バジユラが背中に闇の防護壁を張って、ダメージを抑えてくれる。その間に、俺は膝立ちになって女の子を立たせる。

「おにさん……！」

「俺のことはいいから、逃げて……！」

心配そうに俺を見る女の子。俺は両腕を広げて女の子を影に隠しながら、早く逃げるように声をかける。すると女の子は泣きそうに顔を歪めながら頷いて、俺達に背中を向けて走り出す。

離れていく女の子の背中を見て、俺はホッと息を吐く。

「ハアアッ……！」

だがその瞬間、俺の背中に鋭い痛みが駆け上がる。

「があっ！？」

バジユラの防護壁もろとも切り裂く一撃に、地面に手を着く俺。後ろを振り返り見れば、切り上げの流れに乗せて剣を振りかぶる白騎士がいた。

「たまらず逃がしたみたいだな、止めだッ……！」

その声と共に振り下ろされる白い刃。俺はそれを横に転がって避ける。追撃の刃をかわして、急いで向き直った俺と、睨み合う形になる白騎士。

「……痛ッ……！」

「今度こそ！」

体勢を整えようと、急いで立ち上がろうとする俺。だがそれを抑えつけるように背中に痛みが走る。そんな俺に、白騎士は白い剣の柄を顔の横に添えて、切っ先をこちらに向けて構える。

今にも剣を振るおうとする白騎士。しかし、その横合から太い腕を振りかぶった悪魔が突っ込んでくる。

「死ねや、白いのツ！！」

「な！？」

とつさに左の蹴りを繰り出して自身に迫る拳にぶつける白騎士。だがテラーの巨大な拳は、白騎士をその蹴りもろとも殴り飛ばす。

「ぐわあ！？」

砲弾のように宙を飛び、背中から建物の壁にめり込む白騎士。

『優一ッ！』

「ッ！？」

白騎士の動きを目で追っていた俺は、バジュラの警告に慌てて正面を向く。空を砕きながら目の前へ迫る悪魔の拳。とつさに体を捻って避けるが、轟音を上げて通り過ぎた拳の威力は装甲越しにもビリビリと感じる。

「このッ！」

俺は背中の痛みを振り切るように声を上げて、伸び切ったテラーの腕を潜って懐へ潜り込む。同時に右の拳で鳩尾を撃ち、続けて左拳を脇腹へ叩きこむ。

「ごぉ！？」

拳の連撃に呻き声を上げるテラー。俺はその隙に上がった両腕を潜り抜けて、右手側から膝裏を蹴りつける。

「が！？ この野郎！？」

苦し紛れの裏拳。俺はその一撃もろとも悪魔の頭上を跳び越えて、肩に右拳を叩きこむ。

「ぐッ！？」

だが着地の瞬間、背中の痛みが蘇る。

『おい、優一！ 早く動け！』

「遅いぜ」

俺が痛みに動きを止めた瞬間、丸太のような腕が背後から俺を抱え込む。

「なッ！ があああああ！？」

『優一ッ！？』

そして太い両腕は、俺をそのまま抱き潰そうと圧力をかけてくる。みしみしと軋むような音が体の内と外から鳴る中、俺は拘束を振りほどこうと両腕に力を込める。だが、テラーの太い腕はびくともしない。それどころか、俺の体を宙へ持ち上げる。

「こ、このッ！」

足を振り回して、抱き潰そうとする悪魔にぶつける。しかし、無理な姿勢からの蹴りでは十分な怯ませることもできない。

「ハッハア！！ 人間に魂を売って、人間の攻撃で追い詰められるかの“雷帝”バジユラも落ちたもんだなア、おい！？」

「ぐあああああああ！？」

悪魔の嘲笑と共に、俺を締め上げる両腕にさらに力がこもる。

『優一！ しっかりしろ、優一ッ！』

「ば、じゅら……ッ！！」

奮い立たせようとするバジユラの声。それを聞きながら俺は歯を食いしばって、もがき続ける。だが、テラーの締め上げは全く緩まない。

朦朧とする意識。そんな中、体の軋む音を乗り越えて、鋭いエンジン音が耳に入る。

「あ？ なんだア？」

テラーもその音を聞いたのか呟きを漏らす。そして次の瞬間、締め上げるテラーの体越しに重い衝撃が突き抜ける。

「ぎゃあッ！？」

「ぐう！？」

悪魔が悲鳴を上げると同時に、俺の体が解放されて宙に投げ出され

る。

「う、ぐ！」

正面からうつ伏せになる形で地面に叩き付けられる俺。痛みに呻きながら顔を上げると、黒い二本の角を前に突き出した、どこかソウルの仮面に似たバイクが俺の目の前で大きく後輪を振る形で停止する。

『お前、ヴリトラ！？』

「ヴリ、トラ……？」

俺の知らない名前を呼ぶバジユラ。それを俺が反芻すると、バジユラがヴリトラと呼んだ黒いバイクは、そうだとも言う様にエンジンを唸らせて目を輝かせる。

「ヴリトラ、だと？ まさか、そいつが……？」

呻くような声を漏らしながら、太い両腕を支えに身を起こすテラー。

『優一！ 早くヴリトラに乗れ！！』

急かす様なバジユラの声。それに背を押される様に、俺は戸惑い半分に乱入してきた黒いバイクに跨って、前のめりの姿勢でハンドルを握る。

するとヴリトラは、自分から吠えるようにエンジンを響かせて車輪を回転させ始める。

「ま、まずい！？」

吠え猛るヴリトラに慌てて立ち上がりとする悪魔。ヴリトラはそんなテラーに鋭い衝角を向けて二つの車輪で地面を蹴って駆け出す。
「ぐっ！？」

急加速に思わず呻く俺。瞬間、眼前に迫るテラーの壁のような巨体。
「がああッ！？」

右の角がテラーの身を掠めて、火花を上げて抉り取る。すぐさま前輪を軸に、後輪でタイヤを削りながら機体を切り返すヴリトラ。俺がその背中に必死にしがみつく中、ヴリトラは脇腹を抑えてよろめく悪魔に狙いをつけて、再び突進する。その二本の角は今度は確実に悪魔の身を貫く。

「ごぶはあッ!？」

胸に大きな風穴を二つ開け、跳ね跳んでいくテラーの巨体。背中から地に叩きつけられるそれを追って、ヴリトラが三度駆け出す。

『飛べ、優一!』

「ああッ!」

バジユラの声に応えて、俺はヴリトラのシートの上で両足を揃えて、その加速の勢いに乗って飛ぶ。

「ま、まだまだ! 暴れたりねえええ!! 壊したりねええええ!!」

「黙れ!!」

『その汚れた魂、散らせ!!』

バジユラの声に続き、俺の右足を深い影が包み込む。その右足を突き出して、俺は喚きよるめく悪魔目がけ急降下する。

『「ダークネスストライク!!」』

バジユラと声を揃えて叫びながら、黒い流星となって悪魔の頭を蹴り抜く。

「が、お、ああ、があああああああ!?!」

テラーの断末魔が響く中、俺はまるで迎えに来るように滑り込んできたヴリトラのシートへ跨る。そしてブレーキをかけながら横滑りに停車。同時にテラーの体が轟音を立てて爆散する。

爆風の中心には憑依されていたと思われる逞しい青年がうつ伏せに倒れていた。苦しげではあるものの背中が上下しているのを見ると、命は無事なようであった。

それにホッと息を吐くと、微かに石同士のぶつかる様な固い音が響く。そちらを見れば、壁から抜けだした白騎士が、得物を構えようとしていた。

「お前は逃がさねえぞ……」

敵意をむき出しにする白騎士に対して、俺のヴリトラのハンドルを握る手に力がこもる。

剣を銃モードに切り替えて構える白騎士。

「ぐ！？ な、なんだ！？」

だが、白騎士が足を踏みしめた瞬間、その右足から煙があがり、膝をつく。

『今だ、ずらかれ！』

「ああ！」

バジユラの合図に従って、俺はヴリトラの機首を切り返して急発進させる。

「ま、待て！ 逃げるな！！」

白騎士の叫びを背中に受けながら、俺たちはヴリトラの背に乗って戦いの場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407j/>

仮面ライダーソウル

2011年11月27日17時58分発行